

「原文にはないのや……」

永井 邦彦

40年近く前のことである。我われ独文専攻生には伝説の人となっていた大山定一先生の追悼文集（1977年発行）を読んでいて、はっとする文章に行き当たった。板倉鞆音先生が、リルケの『墓碑銘』のご自分の翻訳を示されたうえで、大山先生の翻訳に言及していた。「豪奢な眠りであったか飲みであったか、とにかく豪奢という言葉が不意にとび出してきて、僕はびっくりした。豪奢は原文ではどうなっているのかと訊ねると、大山さんはにやにやして、原文にはないのやと言った」。しかも翻訳はその後改作され、豪奢は消えて、さらに長くなっているという。

「原文にはない」。まさに目から鱗であった。私は感動した。しかし、なぜ原文にはないことが翻訳できるのか。私には心当たりがあった。そこには、翻訳という行為に対する大山先生の信念がある。

大山先生と中国文学の吉川幸次郎先生が戦争も末期に近づく昭和19年（1944年）に書簡を交換する形で文学研究について論じ合った『洛中書問』という書物がある。私はこれを筑摩叢書の一冊（1974年発行）として読んだが、多くの部分は翻訳論に割かれている。（以下は、敬称を省略する。）

吉川が、大山の「厳密な逐語訳というものは、かさかさに乾びてしまって」という発言を取りあげて、「翻訳というものは、要するに方便であり、童蒙に示す為のものである（…）。外国文学研究の正道は、あくまで原語についてなされるものでなければなりません。同じく方便であるならば、原文のもつだけの観念を、より多からずより少なからず伝える」のが、よいのではないかと問を投げかける。

これを受けて、大山は「翻訳文学というものは今日当然書かれていなければならぬ文学作品を、言わば翻訳という形で示したものと考えたいのです。単なる文学の翻訳ではありません」と答える。大山は、森鷗外や二葉亭四迷を取りあげ、かれらの翻訳の立派さは、「文学者の眼光」から来るものだと言う。そして「翻訳は西洋文学の学問的研究とは何のつながりも無く、もっぱら日本文学者としての自覚と実力が翻訳の可否を決定」すると主張する。

以上の応答からは、両者の力点がずれていること、つまり吉川の主眼は外国文学研究にあり、大山のそれは翻訳文学にあることがわかる。しかしここでは大山の翻訳論に主眼があるので、論点を翻訳に絞ることにする。

翻訳は日本語の文学作品を創作することだとする大山の主張を捉えて、吉川は「翻訳によって創作をなすということは、創作の業が何か素材を必要とする以上、大いに可能なことであり、そうした態度の下にされる翻訳は、たとい素材本来の形に変貌を加えていても、許容されるべき」と認める。しかし、それは「文人の翻訳」であって、「学人の翻訳」ではないと反論し、さらに自らの翻訳論を、「学人の翻訳は（…）広く原語が帯びるだけのものを、つまりもとの言語とその言語の世界の中で象徴せんとするだけのものを、同じ比率で国語の世界で象徴し得る国語、それを探索することで無ければなりません」と補強する。

今度は大山が、高村光太郎の「詩の翻訳は結局一種の親切に過ぎない」を引いてきて、これに解釈を加える。「僕は、この「親切」は作家に対する深い愛情から出るだけでなく、日本の読者に対する愛情や国語に対する尊敬さえふくんだ非常に大きな親切でなければならぬと思います。即ち翻訳のことばの一つ一つが、日本語をゆたかにうつくしくするものかどうか、却って日本語を混乱させ汚くするものところがどうか、すぐれて翻訳家の仕事は無意識のうちにこのような面まで親切な配慮がゆきとどいていなければなりませんまい。」

このような「親切な配慮」をした翻訳は、吉川が言う「原文のもつだけの観念を、より多からずより少なからず伝える」、つまり「もとの言語とその言語の世界の中で象徴せんとするだけのものを、同じ比率で」翻訳することではない。大山にとっては、翻訳は「相似」ではない。大山は「どんな忠実な翻訳でも原作を些かのひずみもなく鏡にうつしとるようなものでなく、原作を読みとる一個人の心のはたらき、原作をうつしとるめいめいの目のはたらき、即ち解釈、理解、追体験、別な国語による表現、というような困難な個別的操作を経なければならぬ以上、翻訳は Wiedergeburt「再生」である」と定義する。

ドイツ語の“Wiedergeburt”は、“wieder”「再び」と、“Geburt”「誕生」から成り立っており、大山流に言えば、翻訳は新たな生命を吹き込んで誕生させること、つまり「創作」なのである。

リルケの『墓碑銘』(Die Grabschrift)の原文を見てみよう。極めて簡潔である。

Rose, oh reiner Widerspruch, Lust,
Niemandes Schlaf zu sein unter soviel Lidern.

逐語的に訳をつければ、「Rose(薔薇)、reiner Widerspruch(純粋な矛盾)、Lust(飲ひ)、niemandes Schlaf zu sein(誰の眠りでもない)、unter soviel Lidern(とてもたくさんの瞼の下で)」となる。大山の『墓碑銘』の翻訳を問題にした板倉の

翻訳と東大教授であり、詩人でもあった生野幸吉の翻訳を以下に掲げる。

(板倉鞆音)

薔薇よ ああ純粋な矛盾 かくも多くの瞼の下で 誰のものでもない眠りで
ある歓び

(生野幸吉)

ばらよ、おお、きよらかな矛盾よ、あまたの瞼のしたで、だれの眠りでもな
いというよろこびよ。

両者とも原詩に対応して簡潔であり、吉川が言う「原文のもつだけの観念を、より多からずより少なからず」、「広く原語が帯びるだけのものを」伝えようとしている。しかしルルケが『墓碑銘』に託した詩想は伝わるのであろうか。

大山は『墓碑銘』を、どのように再生（創作）したのであろうか。『文学ノート』（1970年発行）に「ルルケの薔薇」という論文が収められている。『墓碑銘』は以下のように翻訳されている。

◆38

おお薔薇 純粋なかなしい矛盾のはなよ
はなびらとはなびらは 幾重にもかさなって目蓋のように
もはや誰のねむりでもない寂しいゆめを
ひしとつつんでいるうつくしさ

原文に照らし合わせると、この翻訳はもはや原形をとどめず、原語にはない言葉が次々に紡ぎだされている。修飾的な言葉が重なり、説明過多になった翻訳による別物がつくられていると批判されるだろうか。「創作するという態度」の下でなされる翻訳は、「素材本来の形に変貌を加えていても、許容されるべき」と吉川は書いたが、この翻訳は許容範囲を超えていると判断されるであろうか。

いや、私は原文に照らし合わせてみればみるほど、これが繊細にして、あまりに大胆な創作であることに感動を覚える。大山は「原文にはないのや」と言ったが、原文の逐語的な読み手には「ない」のであって、大山が原文から日本語として汲みだすときは「ある」のである。ここで大山が好んで引用するゲーテの詩句を思い出した。

清らかな詩人の手が掬べば みずは水晶の玉になる

和歌山大学の教養教育は、「人間になるための教育」を標榜している。自分の浅学菲才を顧みずに言えば、私の教養教育はかくありたいと考えるのである。